

ヤンデレ王子を闇落ちから救つたら
愛執まみれの独占欲に囚われました

目 次

ヤンデレ王子を闇落ちから救つたら
愛執まみれの独占欲に囚われました

ヤンデレ王子を闇落ちから救つたら
愛執まみれの独占欲に囚われました

ブロードゲ

森の中の小さな家。その一室に、裸の女がいた。

緩やかな癖のあるダステイローズの髪に、なめらかな白い肌。鎖骨の下には特徴的な文様の痣がある。浮かんでいる。

彼女の痴態を眺める男が、くつくつと喉を鳴らす。

「ツイーラ、足を広げて。僕にもっとよく見せて?」

今の彼女にとって、ナハルドの言葉は絶対である。

自ら足を開いて利音を見せると之の命令にはツバコは顔を赤くして恥じらいを見せた
よつて塗りつぶされてなお、羞恥は残つてゐるらしい。

二二二

遠慮がちに足を開いたツイーラは、許しを乞うように問うた。

「それじゃあよく見えないよ。膝を折り曲げて、もつと大きく足を開いて」

あえて意地悪く言ってみても、彼女はナルドを責めたりはしない。

ハルドの眼前に曝け出す。あらわす

ナハルドは無意識に感想を口にする。

でいる。

一触るよ

熟れた果実に貪りつきたくなる衝動に耐えながら、ナハルドは彼女の割れ目に指を這わせた。
くちゅりと小さく音がして、ぬるりとした液体が絡みつく。ツィーラが自分の愛撫で感じてくれ
ていることに喜びが湧き上がる。

ナハルドが動くたびに、

ナハルドが動くたびに、ツィーラは艶めいた喘ぎ声を漏らす。闇の精靈の力で支配された今の彼女は、ナハルドが何をしたって拒絕しない。ああ、やつと、彼女が手に入った。これでもう、彼女がナハルドから離れていくことはない。仄暗い目をしたナハルドの口元には、いびつな笑みが浮かんでいた。

屋敷は血の匂いで満ちていた。
美しい模様が織り込まれた青い絨毯に、赤色のシミが広がっていく。

殺されたのは屋敷の使用人だつた。ツィーラをいない者として扱う夫に代わつて、よく話し相手になつてくれた優しい女性だ。先日、そろそろ孫が生まれるのだと嬉しそうに話していた。

その彼女が死んだ。ツィーラの目の前で、心臓を剣でひと突きされて。

窓の外では季節外れの霧雨が降り続いている。息苦しいほどの湿気と緊張で汗が止まらない。強く脈打つ鼓動を感じながら、相手の一舉一動を見逃すまいと、ツィーラは固唾を呑んで目を凝らした。

「……どうして」

どうにか紡いだ言葉は震えていた。彼女の紫紺の目は恐怖に染まり、かるく癖のついたダステイローズの髪も輝きを失つてゐるようだ。

怯えるツィーラを前にして、血の滴たる剣を握る男はいつも通り平然としている。

彼の名前はナハルド・フィーネン。精靈王国フィーラシアの第二王子であり、数ヶ月前に挙式したばかりのツィーラの夫である。

美しい男だつた。月の光を編み込んだような柔らかな白金の髪に、高く通つた鼻梁。端整な顔立ちは、まるで精巧に彫り上げられた彫像のようだ。しかし、どこか気だるげな白群の瞳は何の感情も映さず、どろりと濁つてゐるようにも見える。

「君を庇おうとして、邪魔だつたから」

冷たく床に横たわる死体を一瞥して、まるで花瓶を片づけたような口調でナハルドが告げる。彼は剣についた血を一振りして払うと、その切つ先をツィーラに向けた。

この美しい夫のことが、ツィーラはずつと苦手だつた。

初対面から微笑むことなく、妻であるツィーラのことも路傍の石と同じように見る。初夜に部屋に来なかつただけでなく、結婚してからろくに会話もしたことがなかつた。

それでも、こうして剣を向けられるほど恨まれてゐるとは思わなかつたのだが。

「殺したいほど、私が嫌いなのですか？」

「べつに。君のことは好きでも嫌いでもないよ。だけど、君がいればルミエナと結婚できない」
「ルミエナ様と？ 馬鹿を言わないでください。ルミエナ様は王太子妃ですよ！」

ナハルドの虚無の瞳が、ルミエナを見た瞬間だけ光を宿すことにツィーラは気づいていた。

けれどルミエナは王太子妃。彼の兄であるライツェルトとすでに結婚しているのだ。

「知つてゐるよ。精靈に祝福されたルミエナは、王太子妃にこそ相応しい——そう評されて、ライツェルト殿下と式を挙げるところを僕も見たからね」
ナハルドはライツェルトのことを見たからね

ナハルドはライツェルトのことを兄とは呼ばない。

同腹の兄弟であるにもかかわらず、ふたりの間には幼い頃から確執があるのだと噂で聞いたことがある。

「だつたらどうして！ 私を殺したところで、ルミエナ様は手に入りません」

「ライツエルト殿下はもうすぐ消える」

ナハルドの声には確信が込められていた。だが、ライツエルトが不調だという話は聞いたことがない。つい先日も、精力的に政務をしている姿を見かけたばかりだ。

「殿下はご病気なのですか？」

そんなはずないと想いながらも確認すると、ナハルドはゆっくり首を左右に振った。

「殿下の統治に不満を持つ人間もいるんだよ」

ずっと動かなかつたナハルドの唇が、軽く弧を描く。

恐怖を感じる笑みを見て、ツィーラの背筋が凍つた。

「まさか、殿下の暗殺を？」

「さあね。これから死んでしまう君には関係ないことだよ」

おしゃべりは終わりだと言わんばかりに、ナハルドは剣を構え直す。

ツィーラはその刃から逃れるすべを持たなかつた。

逃げようにも、部屋の入り口はナハルドの後ろにあるのだ。悲鳴を聞きつけて助けに来た使用人は、たつた今殺されてしまった。

「……ナハルド様は正気を失つておられます！」

こんなことをして、何になるというのだ。

ナハルドの企てが明るみに出れば、王位になどつけるはずがない。

妻と兄を殺してまでルミエナを得ようと/or>るなんて、常軌を逸している。

「そうだね。僕は闇の精霊に祝福された王子だから」

苦しみの罵りも、ナハルドの心を動かすことはできなかつたようだ。

ナハルドの腕が動く。刃が宙を踊つたかと思うと、凄まじい衝撃とともに視界が暗転した。身体から力が抜けて、ドサリと床に倒れ込む。

赤い命が流れ出て、どんどんと全身が冷えていった。

「これで邪魔者はいなくなつた。やつと、ルミエナを迎えて行ける」

薄れゆく意識の中で、恍惚とするナハルドの声が聞こえた気がした。

ガバリとベッドから飛び起きて、ツィーラは肩で息をした。

寝汗で夜着が肌で貼り付き、心臓が早鐘を打つている。思わず腹部を手で探り、何の傷もないことを確認してホッと息を吐き出した。

（すごく怖い夢だつた。本当に死んだかと思った……）

とても生々しい夢であつたが、現実であるはずがない。

なぜなら、ツィーラはまだ八歳なのだ。結婚などしていないし、ナハルドとも会つたことがない。だけど、ただの夢だとも思えなかつた。

夢の中のツィーラは二十一歳だったが、その年齢まで生きてきた記憶をきちんと有していたのだ。どうやって成長して、ナハルドと婚約を結び、結婚に至つたか。細かな部分まで覚えているなんて、こんな夢は初めてだ。まるで二十一歳まで生きて、死んで時が戻つたかのような気分だつた。

奇妙な夢について考えていると、胸元がチクリと小さく痛んだ。

見下ろすと、鎖骨のずっと下に小さな痣が浮かんでいる。昨日まではなかつたものだ。

「精靈の祝福！」

ツィーラは叫んで、慌ててベッドから飛び下りた。廊下へ飛び出ると、ひんやりとした朝の空気が肌を撫でる。窓の外はまだ暗く、東の空には淡い光が滲んでいた。

起床するには早い時間だつたが、ツィーラは構わずに廊下を走つて母の寝室へと向かつた。

「お母様聞いて、大変よ！」

乱暴に寝室の扉を開ける。ツィーラの母であるアマーリエはまだ眠つていたのだろう、むくりとベッドから起き上がり眉根を寄せた。

「ツィーラ、朝から騒々しいわよ」

「ごめんなさい。でも大事件、精靈の祝福をさずかつたんだから」

アマーリエは、ツィーラの言葉を聞いて目を丸くした。

「まあ、ツィーラ。それは本当なの!?」

「本当よ！ ほら、祝痣が出たの」

ツィーラは興奮した顔で夜着をずらし、胸元の痣をアマーリエに見せた。

美しい模様を描く痣は、ひと目見て特別なものだと分かる。これは祝痣と呼ばれる、精靈の祝福を受けた者だけが受けられる痣なのだ。

「すごいじゃないの、おめでとう！」

アマーリエに祝われて、ツィーラはへりりと相好を崩した。

精靈王国フィーラシアは、初代の精靈王が始まりの精靈と契約を結んでできた国だ。以来、精靈王とその仲間の子孫には何らかの精靈の加護が与えられている。

とはいっても大したことはできない。火の精靈の加護を受けた者は火傷しにくくなるといったような、些細な恩恵を受けるだけである。フィーラシアの貴族であれば何かしらの精靈の加護を受けているが、恩恵がささやかすぎて、自分がどの精靈の加護を受けているか分からないうことがほとんどだつた。

しかしときおり、精靈に特別に気に入られる者がいる。精靈に祝福された証として、身体のどこかに祝痣が浮かび上がるのだ。そして、通常の恩恵とは比べものにならない特別な力が使えるようになる。

アマーリエは急いで書棚から本を取り出した。

祝痣は授ける精靈によつて模様が異なる。ツィーラがどの精靈に祝福されたのか調べるつもりなのだろう。ツィーラも気になつて、アマーリエの横から本を覗き込んだ。

本には様々な模様と精靈の名前が書かれていた。ツィーラも知つてゐる有名なものから、名前も知らないものまでずらりと並んでゐる。

自由に炎を操れる焰の精霊、音楽の才を發揮する音の精霊、人の心を覗き見る鏡の精霊なんでもある。

「あ、お母様これよ！ この模様！」

祝痕と同じ模様を見つけて、ツィーラは慌てて指さした。

期待に満ちた顔をしたアマーリエは、精霊の名前を読んだ直後その表情を曇らせる。

「……時の精霊」

「それってよくない精霊さまなの？」

張りつめたアマーリエの声を聞いて、ツィーラは不安になつた。祝福はめでたいことははずなのに、彼女は嬉しくなさそうだ。

アマーリエはゆっくりと首を左右に振る。

「そんなことないわ、立派な精霊様よ。ただ、時の精霊様のお力は強くて、場合によつては混乱を招くことがあるの」

「時の精霊さまは、どんな力を授けてくださるの？」

「未来を見る力……」

ツィーラは今朝見た夢を思い出して、胸の奥がざわつくような感覚に襲われた。

「今日、すごく変な夢を見たの。もしかして、それが未来視なのかな」

「どんな夢だったの？」

「……大人になつた私が、殺される夢」

ツィーラは今朝見た夢の内容を話した。ナハルド殿下と結婚すること。けれど、殿下は兄嫁であるルミエナを愛していたこと。彼女を得るために、邪魔になつたツィーラを殺してしまうこと。

いつもなら内容なんてすぐに忘れてしまうが、今日の夢は細部まではつきりと思い出せる。

「そう。それはとても怖い夢だったわね」

「あれば未来視だつたらどうしよう。私、ナハルド殿下に殺されてしまうの？」

「ナハルド殿下に……？ 大丈夫よ。時の精霊の見せる未来は、可能性のひとつに過ぎないの」

アマーリエはツィーラを慰めるように抱きしめて、優しく頭を撫でながらある話を聞かせてくれた。

ツィーラシアでは代々、精霊に祝福された者を王妃に迎える慣習がある。その中のひとりに、時の精霊の祝福を受けた王妃がいた。彼女の力である未来視によつてこの先の出来事が分かれば政治も安定するだろうと、彼女はたいへん期待されたらしい。

しかし、王妃が視た未来は外れた。隣国で内乱が起きると予見し、それを見越して準備をしていた国王は困つてしまつたらしい。結局、嘘の報告をして国を混乱させたとして、その王妃は捕らえられたのだ。

のちに、時の精霊の未来視は絶対ではなく、幾重にも枝分かれした未来の可能性のひとつを見せるだけに過ぎないのだと判明して、彼女は釈放された。

「未来は人の手で変えられる。だから、時の精霊様は警笛をくれるだけなのよ」

時の精霊が見せる未来は、悪い内容が多いらしい。そうならないように努力しろという警告なのだろうというのが、アマーリエの言葉だつた。

「時の精霊様の力は、悪いものではない？」

「もちろんよ。だけど、未来が見えるという力は人の欲望を呼び起こすわ。罪人にされた王妃様のように、その力を利用されないとも限らない。……今は、精霊に祝福された少女が現れていないから、特にね」

精霊に祝福された少女——それが未来の王妃候補を指すことに、ツィーラも気づいた。祝福を受けたことで、ツィーラも王妃になる資格を得てしまったのだ。

「王妃様になつたら、私も罪人にされてしまう？」

王太子であるライツエルト殿下は賢明な方だそうなので、そんなことにはならないでしょうけど。

でも、ツィーラの祝福は公にしない方がいいかもしないわ。うちは伯爵家だからなおさら、ね」

ツィーラの生家であるオラクルフ伯爵家では、王妃になるには少し格が足りない。

他に祝福された者が現れなければ候補にあげられるだろうが、ツィーラは今朝見た夢でルミエナが王太子妃となることを知つていた。

夢の内容が正しければ、ルミエナ・グラウフエンは侯爵家の出身だ。黎明の精霊に祝福された美しい女性で、ツィーラよりよほど王妃に相応しい。

「祝福のことは、誰にも話さないほうがいい？」

「お父様とも相談しなければいけないけれど、そうした方がいいと思うわ。ツィーラは秘密にでき

る？」

優しく問い合わせられて、ツィーラはこくりと頷いた。

祝癒を自慢したい気持ちもあるけれど、時の精霊の力はまだ未知数で少し怖い。どんな未来を観たのかと聞かれて、ナハルド殿下に殺されたなんて言えば、不敬だと罰せられるかもしれない。

「ツィーラはいい子ね。さあ、せつかく早起きしたのだから、ドレスの準備をしておきなさい。今日は王城に行く日よ」

ツィーラはパッと顔を明るくした。王城のパーティに行くのは初めてだ。

兄から王城には美味しいお菓子があると散々聞かされていて、楽しみにしていたのだ。

「嬉しい！ あ、でも……ナハルド殿下もいらっしゃるのよね」

今朝の夢を見たあとで、ナハルドに会うのは少し怖い。

「ツィーラ、未来はいくらでも変えられるわ。今のナハルド殿下に何かされたわけではないのでしよう？」先入観で人を見てはダメよ

「……うん、そつか。そうだよね」

もしいつかナハルドに殺されるのだとしても、それはずっと未来の話だ。

それに、ナハルドがツィーラを殺したのは、彼と結婚したからである。ルミエナと結ばれるために妻であるツィーラが邪魔だったからだ。

ナハルドもツィーラ自身を恨んでいたわけではなさそだし、彼と結婚しなければ同じ未来になることはない。

未来は変えられるのだ。ツィーラは安心して、パーティの準備をすることにした。

穏やかな陽光が降り注ぐ王城の庭園は、軽やかな笑い声で満たされていた。色とりどりの花が咲き誇る中に、白いテーブルクロスをかけた円卓がいくつか並べられ、そこに置かれた皿の上には小さな焼き菓子が美しく飾られている。

七歳から十二歳までの子供を対象とした、ガーデンパーティである。それぞれの母親たちが社交をする中、まだ幼い子供たちは自由に庭を駆け回っていた。

毎年行われるパーティであるが、ツィーラは昨年熱を出してしまい参加できなかつたのだ。

ツィーラにとつては、これが初めての社交の場である。アマーリエが張り切つて用意してくれた海の色のドレスはお気に入りだが、華やかなドレスに身を包んだ愛らしい少女たちを見ると、もつと明るい色の方がよかつたのではないかと、そわそわしてしまう。

アマーリエは何人かの貴族に挨拶あいさつをすると、大人たちの社交の場へと向かつてしまつた。子供は子供同士で固まり、友人を作らなければならない。けれども、ツィーラはどうすればいいか分からず戸惑つた。

（兄様がいてくれればよかつたのに）

ツィーラの兄は今年で十三歳。この会への参加資格を失つてしまつたので、今日は留守番をしている。彼がいれば知り合いを紹介してくれただろうが、残念ながらツィーラはひとりだ。

同じ年頃の女の子たちはみんな、庭の中央に集まつて輪を作つてゐる。その中心にいるのは見事なブロンドの髪をした美しい少年だつた。刺繍ししゆの施された上品なジャケットに身を包み、周囲に笑顔を振りまく少年は他の子供たちと違つて見える。

彼こそ精霊王国ツィーラシアの第一王子、王太子のライツエルト・ツィーネンだ。パーティに着いて早々、真っ先に挨拶あいさつをしたから顔と名前は覚えている。

会うのが心配だつたナハルドは見当たらなかつた。挨拶あいさつを求められなかつたということは、きつとこの場にいのいだろう。だからライツエルトに人気が集まつてゐるというわけだ。

ツィーラも他の少女に倣ならつてあの輪に入るべきだらうか。

しかし、ナハルドの兄であるライツエルトに必要以上に近づきたいと思えない。

ならば兄に自慢されたお菓子を食べようとしたものの、周囲を見回してもそんな子は見当たらぬい。マナー違反が怖くて、ひとりで菓子を食べに行く勇気はなかつた。

（パーティ、楽しみにしていたけど……なんか、疲れちやうな）

所在なさげにポツリとしているのも、友達を作れない子として浮いてしまうかもしれない。

目立つのが嫌で、ツィーラは自然と人が少ない方へと移動した。柔らかなピンクの花々は春風に揺れ、まるで微笑んでいるようだ。これが見られただけでも参加してよかつたと思えるほどだつた。遠くに小さな池あずまやと東屋あずまやを見つけた。会場からばかり外れてしまつが、たしか今日は王城の庭であればどこを見て回つてもよかつたはずだ。せっかくなのだから探検してみようと、ツィーラはそちらへ足を向けた。

池の水面がキラキラと輝き、美しい青い羽の蝶がひらりと東屋へ向かう。追いかけるようにしてツィーラも東屋に入ると、ベンチに見慣れぬ少年が座つていて驚いた。

美しい少年だつた。濃紺のジャケットを着ていなければ女の子と間違えただろう。小柄で線が細く、どこか憐れい雰囲気がある。けれど、彼の一番の特徴はその髪色だ。闇を浴びたような真つ黒な髪は、ツィーラシアでは珍しい。

「……誰？」

驚いたように少年が顔を上げる。冬の泉のような淡い水色の瞳と視線がぶつかって、ツィーラはドキリとした。

彼の瞳は、今朝夢の中で見たナハルドとよく似ていたのだ。

（本人……なわけないよね。髪の色が違うし）
ナハルドの髪は月の光を編み込んだような、柔らかな淡い金髪だ。彼ののような漆黒ではない。

「ごめんなさい。パーティに来ていたのだけど、東屋が気になってしまつて」

「そう。じゃあどうぞ。僕はもう行くから」

少年はすぐさま視線を逸らすと、ツィーラに席を譲りどこかに立ち去ろうとする。

「あ、待つて！」

思わず呼び止めると、少年が足を止めてゆっくり振り返つた。

「何？」

「えつと、あなたが先にいたのに、追い出すのは悪いわ。ここで何かしていたんじゃないの？」

「べつに。人が多いと疲れるから、逃げていただけ」

「じやあ私と一緒。せつかくだし、話し相手になつてくれない？ せつかくパーティに来たのに、友達のひとりも作れそうになくて」

ツィーラが提案すると、彼は目を丸くした。

「話し相手つて……僕でいいの？」

「え？」

「向こうにライツェルト殿下がいる。そつちに行つた方がいいよ。僕は……こんな髪だし」

彼は自分の真っ黒な髪をつまんで、嫌そうに顔を顰めた。

もしかして、彼は自分の髪が嫌いなのだろうか。

「ライツェルト殿下の周りには、もう人がいっぱいいたわ。あの中に入るのは疲れそうだもの。それに、髪がどうかしたの？ 綺麗な黒髪じやない」

「綺麗？」

「ええ。夜の空みたいで素敵な色だと思うけど……」

ツィーラが言うと、少年は戸惑つた表情をした。

「そんなの、初めて言われた。……黒は闇の精霊の色だから、気持ち悪いって」

「誰にそんなひどいことを言われたの？」

「面と向かつてではないけど、みんな、陰で言つてる」

白群の瞳が寂しそうに陰るのを見て、ツィーラは胸が苦しくなつた。

どうしてこの瞳をナハルドと似ているなんて思つたのだろう。ナハルドの瞳はそれこそ闇の淵を覗き込むような深い虚無をたたえていたが、彼の瞳はきちんと感情を宿している。

「私はそんなこと思わないわ。パーティに退屈してたの。嫌じゃなかつたら付き合つて？」

もう一度誘うと、黒髪の少年は少しだけ躊躇つたあと、ツィーラの正面に座り直した。

人見知りなのだろう、彼の視線はそわそわと宙をさまよつて落ち着かない様子だ。

「王城の庭はとても綺麗ね。さつき、青い羽の蝶がいたの。珍しい模様で素敵だつた」

「……たぶん、アズルフィアかな」

「知つてるの？」

「羽に黒い斑点があつたなら、だけど。鱗粉に発光作用があつて、夜になると光るんだ」

「斑点もあつた気がするわ。夜に光るなんて素敵ね！」

「他にもゼリアスつて蝶もいるよ。青紫つぱい色だつたら、こっち」

「深い青だつたから、そつちじやないと思う。あなた、物知りなのね」

ツィーラが感心すると、少年は照れたように髪の端を指で弄つた。

「図鑑を見るの、好きなんだ。虫とか、あと、植物も」

「それじゃあ、あのピンクの花はなんて名前か知つてる？」

「ええと、あの花はローゼリアだね。その横の黄色のはセルリス」

少年は庭園の植物に詳しくて、庭に咲く花の名前を次々に教えてくれた。ツィーラも楽しくなつて、色々と尋ねてしまつた。

しばらく花や虫の話で談笑してから、ツィーラは彼に微笑みかける。

「ありがとう。慣れないパーティで緊張していたのだけど、おかげで楽しかつたわ」

「う、ううん。……僕の方こそ、楽しかつた」

もじもじしながら頬を赤らめてお礼を告げる様子は、なんだかいじらしくて微笑ましい。

「君はこのパーティ、初めてなの？」

「そうなの。去年は熱を出してしまつて参加できなくて。お母様に友達を作りなさいって言われていたんだけど、女の子はみんなライツエルト殿下に夢中で話しかげづらくつて、どうしようかって思つてた」

パーティに参加したのに誰とも話せなかつたら、さすがに怒られてしまうかもしれない。彼と交流できてよかつた。

「ライツエルト殿下には興味ない？」

「うーん。どちらかといえば、あまり近づきたくないかも」

ツィーラの祝福が露見すれば、ライツエルト殿下の婚約者にされてしまうかもしれない。

そうなれば周囲の嫉妬を買うだろうし、仮に婚約者になつても、やがてルミエナに祝福が現ればその立場を追われることになるだろう。

それに、ライツエルトと仲良くなれば、自然とナハルドとも顔を合わせることになりそうだ。

「変わつてるね。女の子はみんな、ライツエルト殿下みたいな人が好きかと思つてた」

「人の好みはそれぞれじゃないかな。私はあなたの方が話しやすそう」

「ほ、本当に……？」

「うん。あ、でも、べつにライツエルト殿下が嫌だつてわけじゃないよ」
不敬だと思われてはいけないと、ツィーラは慌ててつけ足した。

少年も分かつてゐるというように頷く。

「……殿下が嫌いだなんて人はいないと思う。格好いいし、優秀だし」

何だか、やけにライツエルトを気にしているようだ。どうしてなのかと不思議に思つたが、同年

代の少年ならば彼を意識するのは当然かと考え直す。

なにせライツエルトは悪い噂を聞かない。容姿端麗、勉学も優秀らしく、次期国王として周囲から期待されている。同性であれば嫉妬心が芽生えるのも自然だろう。

「でも、あなただつて素敵だと思うよ？　すごく綺麗な顔をしてるし、物知りですごいなつて思つたもの」

ライツエルトと比べて落ち込んでいる様子だつたので、ツィーラはそう言つて彼を励ました。

「あ、ありがとう。……僕、その、こんな髪だし、友達とかいなくて。婚約者を作れつて言われるんだけど、そんなの絶対に無理で……」

婚約者という言葉を聞いて、ツィーラはピンと閃いた。

そうだ。先に婚約者を作つておけば、ナハルドとの結婚を避けられるのではないだろうか。

そうすれば、自然とツィーラが殺される未来も回避できる。

「それなら、もしよかつたらだけど、私を婚約者にしてみない？　私もまだ相手が見つからな

くて

「えつ？」

「あ、でも身分とか釣り合わないかな？　うちは伯爵家なんだけど」

「……う、ううん。僕は色々事情があるから、伯爵家と婚約しても問題ないとと思う」

少年の言葉を聞いて、ツィーラはおやつと思つた。こういう言い方をするということは、彼の身分はおそらくかなり高いのだろう。

しまつた。婚約だなんだと言つ出す前に、先に名前と家名を聞いておくべきだつた。

「あの、今さらだけど名乗らせてね。私は——」

「ツィーラ、どこにいるの？」

名乗らうとした瞬間、アマーリエがツィーラを探す声が聞こえてきた。

「お母様だ！」

もうお開きの時間なのだろうか。ツィーラは慌てて立ち上がり母を呼んだ。

ツィーラに気づいたアマーリエが、^{あさまや}東屋へと歩いてくる。

「まったくもう、どこにいるのかと思つたわ。……あら？」

ツィーラと一緒にいる少年に気づいたアマーリエは、驚いた顔をしてから、少年とツィーラを見比べた。

「……驚いたわ。ツィーラ、ナハルド殿下と一緒にいたの？」

「えつ!?」

驚いたのはツィーラの方だ。この少年がナハルド殿下？

「う、嘘、だって、殿下は金髪じやあ……」

「……気づいていなかつたのね」

呆れた声でため息を吐くアマーリエを見て、ツィーラは焦った。

アマーリエがこんな嘘をつくはずがないので、この少年が本当にナハルドなのだ。

たしかによく見ると瞳の色は同じだし、顔立ちに面影もなくはない。

「ナ、ナハルド殿下……なの？」

恐る恐る当人に確認すると、彼はこくりと頷いた。

「……うん。僕はナハルド・フィーネンだけど」

「でも、だって、ナハルド・フィーネンだけど」

「よく知つてるね。僕、もともとは金髪だつたんだ。でも、闇の精霊に祝福されてからこんな色になつちやつた」

ナハルドの言葉にツィーラは驚いた。精霊の祝福で髪の色が変わるなんてことがあるのだろうか。しかし、未来のナハルドは金髪に戻つていた。いつたいどういうことかと尋ねたかったが、未来視のことを話すわけにもいかない。

「ツィーラ。しつかりと殿下に挨拶なさい」

娘の戸惑いに気づいたアマーリエが、場の空気を変えるように挨拶を促す。

ツィーラはハツとして、慌ててスカートの裾を摘んだ。

「ツィーラ・オラクルフです。殿下、本日はお付き合いいただき、ありがとうございました」

「ううん、僕も君と喋^{しゃべ}れて楽しかつた。ツィーラ、よかつたら僕とまた遊んでくれる？」

「も、もちろんです」

これだけ親しく話をして、今さら嫌だと言えるはずがない。ツィーラは声が裏返らないよう注意しながら、引きつった笑みを浮かべたのだった。

「どうしてナハルド殿下がいるつて教えてくれなかつたの!?」

帰りの馬車の中でツィーラが叫ぶと、アマーリエは困つた顔をした。

「私も殿下はいらつしやらないと思つていたのよ。お姿が見えなかつたし、あまり表舞台には出でこない方だから、今日も欠席されていたのかと」

アマーリエもナハルドが来ていたことは知らなかつたらしい。

彼は隠れるよう^{あずまや}に東屋^{あずまや}にいたので、挨拶^{あいさつ}ができなかつたのだろう。

「でも、殿下が黒髪だつて教えてくれなかつたのに」

髪の色が違うのだと知つてさえいれば、誤解することなんてなかつたはずだ。

「ツィーラが知らないと思わなかつたのよ。未来を視たのでしよう？」

「未来ではナハルド殿下は金髪だつたの！」

ツィーラは不服だつたが、アマーリエが教えてくれなかつたのも仕方がない。彼女からすれば、それこそ未来視で本人を見ているツィーラがナハルドの髪色を誤解しているとは思わなかつたのだ

ろう。

「では、未来の殿下は闇の精霊のお力を制御されていたのね」

ナハルドはもともと金髪で、祝福によって髪の色が変わったのだと言っていた。つまり、力を制御できれば元の髪色に戻るのかもしれない。

しかしそんなことを、あのときのツィーラに気づけるはずがなかつた。

髪色が違うのだから別人なのだと思い込んで、すっかり気を許してしまつたのだ。

「どうしよう、お母様。私、ナハルド殿下に婚約を申し込んじゃつた」

ツィーラが青ざめると、アマーリエは頭が痛いとばかりに額を押さえた。

「……あなた、ナハルド殿下を避けたいのではなかつたの？」

「避けたかつたの！ だから、さつさと別の人と婚約しちゃおうと思つたのよ」

まさか、ナハルドが黒髪になつてゐるだなんて思はないではないか。

ツィーラは彼の成長した顔しか知らないのだ。髪の色が違うのだから、別人だと考へるに決まつてゐる。

「だからといって、名前も聞かずにそんな話をするだなんて愚かすぎるわ」

アマーリエの言葉はもつともすぎて、ツィーラは何も言えなくなつた。

婚約だなんて大事なことを、その場の勢いで話すべきではなかつたのだ。

「どうしよう……私、夢と同じようにナハルド殿下と結婚しちゃうの？」

「婚約は家と家の結びつきですもの。子供同士の口約束で実現することはないでしようけど……ナ

「ハルド殿下の場合は分からぬわね」

王族の嫁になるには、オラクルフ家は少々格不足だ。伯爵家でも力がある家であればいいが、オラクルフ家は大した収入のない小さな領地を持つだけの中流貴族。普通ならば婚約者候補には挙がらない。

しかし、相手がナハルドとなれば話が別だ。彼は闇の精霊の祝福を受けている。それは一種の呪いのようなもので、闇の精霊に関わるなんてと繋がりを持つことを嫌がる者が多いらしい。ゆえに、ツィーラのような身分の者でも婚約を認められる可能性がある。

だからこそ、未来視の中でもツィーラが彼の婚約者として選ばれたのだろう。

「本当に申し込みが来てしまつたらどうしよう」

「王家からの申し出なんて、よほどの理由がないと断れないわよ？」

「うつ、わ、分かつてゐる……」

「貴女の祝福を明かせば別でしようけど……ライツエルト殿下の婚約者になる気はある？」

現状、貴族令嬢で精霊からの祝福を得ているのはツィーラだけだ。公表すれば、おそらくナハルドではなくライツエルトとの婚約話が持ち上がるだろう。

しかし、ツィーラはゆつくりと首を左右に振つた。

「ライツエルト殿下は、ルミエナ様と結婚するはずよ。ふたりのお邪魔虫になるのは嫌だし……ツィーラの脳裏に、庭園で話をしたナハルドの白群の瞳がよぎつた。未来で見たナハルドと違つて、彼の瞳にはきちんと感情が宿つていた。

未来は変えられるというのなら、ああなつてしまふ前にナハルドをどうにかできないだろうか。ライツエルトの婚約者になればナハルドを避けることはできるが、それだと彼が兄と対立する未来は変わらない。

あの悲劇を避けるためには、ナハルド自身をどうにかしなければいけないのだ。

「夢の通りになるのは嫌だけど……私、ナハルド様とお友達になつてみたい」

未来視のことがあつて動搖していたが、別れ際に彼はまた遊びたいと言つてくれたのだ。

正直、未来のナハルドは怖い。だけど、あれはまだ訪れていない未来だ。先入観で見てはダメだとアマーリエも言つていたではないか。

今のナハルドには何もされていないのに、避けるのはおかしい。

「そう、あなたの気持ちは分かつたわ」

アマーリエはそつと目を伏せたあと、励ますようにツィーラを見つめた。

「ナハルド殿下は複雑な立場におられるわ。どうか、味方になつてあげて」

「……味方に？ 何をすればいいの？」

「難しいことではないわ。あなたの言つた通り、お友達になつてあげればいいの」

アマーリエの言葉に、ツィーラはこくりと頷いた。

それならば大丈夫だ。もともと、あの物知りな少年ともつと仲良くなりたいとツィーラも思つていたのだから。

二章 閨の精霊の力

パーティから数日後、ナハルドとの婚約に関して両親のもとに何らかの話が来たらしい。

はつきりと決まつたわけではないが、おそらく一度ふたりの相性を見て前向きに検討しようという感じなのだろう。王城に遊びに来るようになると、ツィーラに誘いがあつたのだ。

これは未来視にはなかつた流れだ。

夢の中でのツィーラがナハルドと出会つたのは、大人になつてからだつた。

先日のパーティでツィーラが東屋あずまやに行つたのは、ライツエルトを避けたためだ。夢を見ていなければあの女の子の輪の中に加わつて、ナハルドと知り合わなかつたのだろう。

この時点でもう未来は変わり始めている。

だつたらきつと、ナハルドを変えることだつてできるはず。

ツィーラは明るいレモン色のドレスを着て、アマーリエと共に再び王城を訪れた。

先日は庭でのパーティだつたが、今日は王城の中に入れるらしい。兵士に守られたアーチ状の門を潜ると、そこはシャンデリアが吊り下げられた広いホールだつた。しかし閑散としているわけでなく、メイドや文官たちが忙しそうに行きかつてゐる。城の東棟がプライベートな空間になつてゐるらしく、ツィーラたちはそちらへ案内された。

ぴかぴかに磨かれた廊下を歩いて応接室へと入る。椅子に座ると、すぐさまメイドがお茶を運んできた。

少し待つていると、銀糸の刺繍が贅沢にあしらわれたドレスを着た、美しい女性が現れる。おそらく彼女が王妃なのだろう。顔立ちがナハルドによく似ている。アマーリエが礼をするのを見て、ツィーラも慌ててそれに倣つた。

彼女に続いて入室したのはナハルドだった。伏し目がちに歩く姿は美しい人形のようだ。一瞬だけ目が合うが、彼の瞳はすぐさま別の場所へと逸らされる。

「ようこそいらしてくださいました。オラクルフ伯爵夫人、ツィーラ嬢」

王妃の声は鈴を転がすように柔らかで、それでいてはつきりとした威厳を持つていた。

「お目にかかる光榮でございます、王妃殿下、ナハルド様」

アマーリエが再び深く頭を下げる。ツィーラもそのあとを追うように礼をした。

「本日はこうしてお目にかかる事、大変嬉しく思います。ツィーラ嬢、先日はナハルドと仲良くしてくださったのだと。ナハルドはとても人見知りで友人もいないので、これからも仲良くしてくださると嬉しいわ」

そう声をかけられて、ツィーラは顔を上げた。王妃の微笑は優しく、けれど視線の奥には見定めるような光が宿っている。

「も、もつたないお言葉にございます……」

ツィーラの返事に満足したように微笑んだあと、王妃はナハルドへと視線を移す。

「ナハルド、こんな場所で話なんて退屈でしよう。ツィーラ嬢を中庭にご案内して差し上げては？」
緊張しているツィーラに気づいたのだろう、王妃がナハルドに提案した。

彼は小さくうなずくと、ツィーラをエスコートして部屋を出る。

中庭はすぐ近くにあつた。暖かな陽光が降り注ぎ、まだ若い葉をつけた木々が風に揺れて柔らかな音を立てている。王城は多くの人が行きかっていたが、ここには人がいなくて静かだった。

花壇の前に置かれた石造りのベンチに案内され、ふたりで並んで腰かける。
すぐ近くにあるナハルドの横顔はかたく、白群の瞳は愁いを帶びている。重たい沈黙が続いたあと、彼はゆっくりと唇を動かした。

「……ごめんね」

開口一番に謝罪されて、ツィーラはきよとんとした。謝られる心当たりがない。

「君のことを、母上に話してしまったんだ。そうしたら婚約者にどうかつて」

なるほど。どうやら彼は自分のせいと婚約話が浮上したと思っているらしい。

「いいえ、それは私のせいですよ。私がナハルド様におかしなことを言つてしまつたから」
婚約しようと提案したのはツィーラが先だ。彼が謝罪することではない。

「でも君は、僕のことを知らなかつたんでしょう？」

「それは——」

「僕の名前を知つた途端、君の態度が変わつた」

ツィーラはパーティの日のことを思い出した。

たしかにあのときのツィーラは黒髪の少年がナハルドだと知つて、しまつたと思つたのだ。顔に出さないように注意していたが、彼はツィーラの気持ちを見抜いていたのだろう。

「……ごめんなさい」

「いいよ、そういうのは慣れてるし。謝るべきなのは僕の方なんだ。友達ができたかもつて……勘違いして、君のことを話してしまった。君にとつては迷惑だつたろうに」

ナハルドはじつと中庭の土を見つめながら言葉を紡ぐ。

彼の言葉を聞いて、ツィーラはあの日の自分の態度を反省した。先入観を持つなどアマーリエに言われていたのに、彼を拒絶して傷つけてしまった。

「勘違いじゃない！……です。私、本当に友達になりたいって思つて……でも、殿下だつて知らなくて、すごく動搖してしまって」

ダメだ、何を言つても言い訳になつてしまつ。だけど、ナハルドに殺される未来を見たからだなんて言えるはずもない。

「無理しなくていいよ。闇の精霊の祝福を受けた人間なんて、気持ち悪いでしょ？」

「それは違います！」

今度はきつぱりと否定できた。

ツィーラが恐れているのは、闇の精霊なんかじゃない。

「私は闇の精霊のことをそんなに怖いと思つていらないんです。それに、祝福は選べないって知つていますから」

祝福は本人が望むかどうかに関係なく、精霊から一方的に与えられるものだ。

ツィーラだつて、祝福を受けるまで時の精霊のことをよく知らなかつた。

ナハルドが祝福を受けたという、闇の精霊に對して偏見がないわけではない。

よくない精霊、怖い精霊だという話は聞いているし、物語でもいつも悪役として登場するので、悪い印象はあつた。けれども、だからといって祝福されている者を怖いと思うかは別である。

未來のツィーラは、ナハルドのことを苦手に思つていた。でもそれは、ナハルドの瞳が怖かつたからだ。何を考えているかまつたく読めない虚無の瞳は闇そのものようで、ああ、これは闇の精霊の寵愛を受けているからなのかと思つたのだ。

だけど、今のナハルドの瞳は怖くない。

ツィーラの態度で傷つき揺れている、普通の子供のものだ。

「ナハルド様は怖くありません」

にこりと笑つてみせると、ナハルドの目が地面から持ち上がりツィーラを捉えた。

視線がぶつかつた途端、ナハルドの頬が朱色に染まり、彼は慌てた様子で唇を開く。

「そつ、そんなの、僕のことを知らないから言えるんだ。闇の精霊の力を、知らないから」「髪の色が変わる以外に、何かあるんですか？」

「……試してみる？」

ナハルドはそう言うと、悲しそうな顔をしてツィーラの頬に手を伸ばした。

彼に触れられた瞬間、ドクンと大きく心臓が鳴る。

それと同時に、まるで夢の中にいるようなふわふわした気持ちになった。

（あれ？ ナハルド殿下って、こんなに素敵だつたっけ……）

なんだか突然、ナハルドのことが魅力的に見えてきた。

彼が好きだ。彼に好かれたい。この人に悲しい顔をさせたくない。

ナハルドの言うことなら何でも叶えてやりたいという気持ちになつたところで、パンツと手を叩く音がして、思考がクリアになつた。

ツイーラは驚いて、再びナハルドの顔を見る。美しい顔だが、先ほどのような強烈な魅力は感じない。えも言われぬ恐怖を感じて、じわりと汗が滲んだ。

「……い、今……なに？」

「闇の精霊の力だよ。君が僕を好きになるように、精神を支配したんだ」

それはたしかに恐ろしい力だと思った。心が自分のものではなくなるという体験は、最悪といつていいくらいに不快だつた。

闇の精霊が嫌われているのは、祝福した相手に、こんな力を与えるからというのもあるのだろう。「だ、誰にでもこんなことができるんですか？」

「複数人を同時に操ることはできないし、限界もあるけどね。僕を好きにさせるだけじゃなく、誰かを怖がらせることも、もしかしたら自殺させることだってできるかもしれない」

「……それは、たしかに恐ろしい力ですね」

ツイーラは未来のナハルドを思い出した。ツイーラヒライツェルトを殺して、どうやつてルミ

エナの心を得るつもりだつたのだろうかと思つていたが、彼には他人の心を変える力があつたのだ。その気になれば相手の心を支配できるのだから、ルミエナを得ることも可能だ。

正直言つて、ナハルドが恐ろしかつた。

ツイーラの手が震えているのを、ナハルドは見逃さなかつたようだ。

「僕が嫌われる理由が分かつたでしょ？」

ナハルドは自嘲して、そつとツイーラと距離を取つた。そうするのが当たり前だというように、悲しそうな顔をしてツイーラから離れたのだ。

何をかもを諦めたようなその表情がすごく苦しく見えて、ツイーラは咄嗟にナハルドの腕を掴んで自分の方へと引き寄せた。

そのままナハルドを抱きしめると、彼はビクッと身体を固くした。

「ツ、ツイーラ？ な、何するの!?」

「いきなりごめんなさい！ でも、なんだか、すごく悲しくて」

ツイーラが怖い未来を見たとき、アマーリエが優しく抱きしめて慰めてくれた。

それと同じように、大丈夫だという気持ちを彼に伝えたくなつたのだ。

「……大丈夫ですよ。だつて、ナハルド様はそんな力があることをわざわざ私に伝えてくださつたんですから。誰かの気持ちを無視して力を使つたりしないつて信じられます」

ナハルドの力は怖かつたが、それよりも未来視で剣を向けられたときの方がずっと怖かつた。あのときのナハルドは、ツイーラを殺すことをなんとも思つていなかつた。だけど今のナハルド

は、ツィーラを怖がらせて遠ざけるために力を使つたのだ。

きっと、期待しないように。仲良くなつてから、裏切られないように。

当たり前のようにそう行動するナハルドは、今までどれだけ傷ついてきたのだろうか。

何も感情を映さない、虚無の瞳をした未来のナハルド。彼がああるまでに、いつたいどれだけのつらい経験をしてきたのだろう。

「ツィーラ……やめて、離して……僕を、期待させないで……」

離してと言いながら、ナハルドは抵抗する素振りを見せない。

本当は彼も期待したいのだろう。だから、ツィーラを突き放さない。

「……本当はツィーラも怖いんでしょ。だって、手が震えてる」

「怖い……ですよ。でも、ナハルド様と友達になりたいって思います」

完全に恐怖が消えることはないだろう。ナハルドの力も、彼に殺されるかもしれないという未来も怖い。

だけど、ツィーラはナハルドと向き合ふと決めたのだ。彼の味方になるのだと。

それに、たぶんきっと、彼は怖いだけの人じやない。

「……僕と、友達になつてくれるの？」

「ナハルド様が望んでくれるなら。また、綺麗な虫とかお花の名前とかを教えてください」

ツィーラが頼むと、返事の代わりに彼の腕が背中に回つた。

ツィーラとナハルドが友人関係になつてから、半年が経過した。

ツィーラはナハルドと文通しながら、ときおり王城に遊びに行くという生活を続けている。

ナハルドとの友情は順調だ。本が好きだというナハルドは、ツィーラの知らない知識を色々と教えてくれるので、話をしていく面白い。

ふたりが交流を深めるのを見て大丈夫だと判断されたのか、正式に婚約を結ぶことに決まった。

ツィーラはそれを素直に受け入れた。ナハルドから逃げるのではなく、向き合おうと決めたからだ。

「ツィーラは本当によかつたの？ その、僕と婚約することになつて」

ナハルドとの婚約が決まつた翌週、いつものように王城にある彼の部屋に遊びに行くと、ナハルドは不安そうにツィーラに問い合わせてきた。

「もちろん！ ナハルドと婚約できるのは嬉しいよ」

ツィーラが笑うと、ナハルドはホッと息を吐き出した。

ナハルドが王子だと知つてから、しばらくツィーラは敬語で話していたが、彼の希望で気安い言葉を使うようになつた。様をつけるのではなく、家族のように気安く接してほしいと頼まれたのだ。

ナハルドに何かを頼まることは珍しかつたので、ツィーラは喜んでその提案を受け入れた。無理にならないか心配だつたが、婚約者という間柄なら問題ないだろう。

「ナハルドこそ嫌じやないの？ 私が婚約者になるの」

「嫌なわけないよ！ 君と結婚できるなら、嬉しいし……」

ナハルドは顔を赤らめてもじもじとする。

喜んでもらえるのはありがたいが、ナハルドと結婚となるとどうしても不安が頭を過る。

未來のナハルドは、ライツエルトと結婚したルミエナに横恋慕をしていた。何にも興味を持たないよう見えたナハルドが執着したくらいだから、よほど惹かれるものがあつたのだろう。

（もしかしたら今のナハルドも、ルミエナに恋をするのかもしれない）

「ねえ、ナハルド。もしこれから先、他に好きな人ができたらいつでも言つてね。私はいつだつて

ナハルドを応援したいし、そのために婚約を解消する覚悟もあるから」

「……どうしてそんなことを言うの？」

ナハルドの表情がすつと凍る。白群の瞳が陰つた気がして、ツィーラは慌てた。

「ナハルドが嫌なわけじゃないよ？ ただ、私たちはまだ幼いし、大人になつたら他に好きな人ができるかもしれないでしょ？」

「僕が好きになるのはツィーラだけだよ。ツィーラは違うの？ 他の誰かを好きになる？」

ナハルドは間髪容れずにツィーラの言葉を否定した。

一途に慕つてくれるのありがたいが、それは刷り込みのようなものだと思つてはいる。初めてできた友達だから執着しているだけで、もつと交流が増えれば他に興味が向くようになるだろう。

「今はそうでも、未來のことは分からぬでしょ？ だから、もし他にそういう相手ができたら教えてほしいっていうだけだよ」

「何年経つても変わらないと思うけど……分かつたよ。でも、代わりにツィーラもそういう相手が

できたら真っ先に教えてね。絶対に」

「う、うん、分かつたよ。約束する」

やけに強く言われて、ツィーラは戸惑いつつも頷く。

そのとき、遠慮がちに部屋のドアがノックされた。

「ナハルド様、お茶をお持ちしました」

「……ありがとう、入つていいよ」

ナハルドが許可を出すと、緊張した面持ちのメイドが入室してくる。

彼女は堅い表情でテーブルにカップと菓子を置くと、一秒でも早く部屋を出たいとばかりにすぐさま扉に向かつた。「失礼しました」と短く退出の挨拶あいさつを告げると、逃げるよう部屋を出ていく。

ナハルドに接する使用人は、いつだつてこんな様子だ。

「ねえ、担当のメイドを代えてもらつた方がいいんじゃないの？」

いくらなんでも、あの態度はいかがなものか。

思わずツィーラが零すと、ナハルドは首を左右に振つた。

「仕方がないよ。彼女だつて、僕を担当したいわけじゃないだろうから」

「でも……」

「それに、使用人に怯えられるのは僕のせいなんだ」

ナハルドはまだ、闇の精靈の祝福を上手く制御できていない。感情が高ぶると力が暴走して、近づくにいる人間を無意識に洗脳してしまうのだと。そのせいで過去に、使用人を大変な目に遭わせ

たことがあるらしい。

その事件がきっかけで、ナハルドは腫れ物に触るような扱いをされているのだ。

「闇の精霊の力はまだ制御できていないんだ。同じことが起きない保証なんてないのに、怯えるなんて言えないよ」

たしかに、いつ力が暴走してしまったか分からるのは扱いに困るだろう。

心を支配されたことを思い出す。精神を塗りつぶされるようなあの感覚は、本当に恐ろしかった。

「練習とかできないのかな。そういう力つて」

ツイーラも協力できればいいのだが、時の精霊の力は意識して使えるものではないらしい。彼と違つて精霊の影響を感じることもないし、あの日以来、別の未来を見ることもなかつた。ナハルドの役には立てないだろう。

「制御するコツはあると思う。……ライツェルト殿下ができているから」

ライツェルトの話題を出すとき、ナハルドの表情は複雑なものになる。

兄であり、光の精霊の祝福を受けているライツェルト。同じように強い力を持っているにもかかわらず、素晴らしい人々に受け入れられて、彼の周囲にはいつも人が集まっている。ライツェルトが悪いわけではないが、ナハルドからすれば思うところがあつて当然だろう。

「ナハルドは、ライツェルト殿下のことを兄様とは呼ばないの？」

ナハルドはずつと彼を他人のように「ライツェルト殿下」と呼んでいる。

兄弟間の交流も少ないらしく、ナハルドとライツェルトが会話しているところを見たことがな

かつた。

「……嫌つているわけじゃないけど、僕と違いすぎるから。どうにも家族だと思えなくて」

「兄弟で一緒に何かしたりしないの？」

「昔は一緒に勉強していたんだ。でも、僕が精霊に祝福されてから、陛下やライツェルト殿下にはあまり関わるなつて言われて」

「……そう」

ひどい話だと思うが、そう判断を下した者を責めることもできなかつた。

王や王太子は国の重要人物だ。万が一にも、何者かに操られることなどあつてはいけない。

ナハルドが自分の意思で力を制御できないのなら、なおさらだらう。

「光の精霊も、闇の精霊と似たような力を持っているのに。理不尽だなとは思うよ」

「光の精霊の力も人の心を操るの？」

「心じやないけど、光の精霊の力は相手の行動を支配することができるんだ」

闇の精霊は相手の心を塗りつぶすが、光の精霊は相手の身体の支配を奪う。対になる精霊なだけ

あつて、その力はたしかに似通つていて。

「似たような力なのに、光の精霊は宿められているのよね」

「建国時に王に協力していたという話があるし、相手の精神を奪うよりも身体の自由を奪う方が、まだ健全だと思われているのかもね。あと、光の精霊の方が制御しやすいのもあるかも」

光の精霊の力が暴走することはあまりないのだとか。

同じように祝福を受けても、ライツエルトの髪色は変わったりはしなかつたらしい。

「ライツエルト殿下なら、力を制御するコツとかが分かるのかな」

相談したりはしないのだろうか。接触を止められているのだとあっても、手紙か何かでやり取りすることならできると思うのだが。

「あの人なら何か知っているかも知れないけど、今さら聞けないよ」

ナハルドは四歳のときに祝福を受けた。それ以降、ずっとライツエルトとは話していないらしい。もともと特に仲がよかつたわけでもないこともあって、どう接すればいいか分からぬようだ。

彼が会話する家族は母くらいで、同じ城で暮らしているというのに、父と兄とは疎遠だという。その母に対しても、厳格な性格のため甘えることなどはできないのだとか。

ツイーラが口を挟むことではないかもしれないが、寂しいと思った。

ツイーラの家族は仲がいい。母は優しいし、仕事で忙しい父とはあまり会話できないけれど、遠くに出かけたときは必ず土産を買って帰つてくれる。兄とは喧嘩するものの、それなりに良好な関係だと思う。

ナハルドにだつて、甘えられる家族が必要だ。

きっと孤独をこじらせてしまったから、未来で暴走することになるのではないか。

「私、ナハルドの代わりにライツエルト殿下に聞いてみるよ」

直接話したことはないが、ライツエルト殿下は優しい人だと聞いた。弟が困つているのだと知れば、手を差し伸べてくれるだろう。

「ツイーラ？」

「ナハルドが会つちゃダメって言われてるなら、代わりに私が動くから。力のこと、お兄さんに相談してみよう？」

「必要ないよ。迷惑だつて思われるかも知れないし」

「噂で聞いた感じだと、そういうことは言わなそうだけど」

「それは……そうかもしれないけど」

ツイーラの言葉が正しいと思ったのか、ナハルドは押し黙る。

おそらくツイーラのときのよう、彼は拒絶されることを恐れているのだと感じた。誰かが強引に手を引っ張らなければ、きっと動けないのだろう。

尻込みするナハルドを押し切つて、ツイーラはライツエルトに面会を申し込んだ。

忙しいだろうと思っていたのだけれど、意外にあつさりと面会の許可が下りて、ライツエルトに会えることが決まる。

指定された部屋に向かうと、すでにライツエルトが待つていた。直前まで何かの書き物をしていたようで、執務机の上にはいくつかの紙束とペンが置かれている。

「ライツエルト殿下、面会に応じてくださりありがとうございます」

「気にするな。君はナハルドの婚約者に決まつたのだろう？ 一度、話してみたかったんだ」

ライツエルトはふわりと微笑んだ。まっすぐツイーラを射貫く目には自信が満ちているように見

える。喋る声にも明るさと力強さがあり、聞いていて心地よい。

ナハルドとはずいぶん霊園気が違うと、ツイーラは思った。

「以前のパーティでは、挨拶だけしてどこかに行つていたな」

「覚えていらっしゃるのですか？」

城でのパーティのことを持ち出されて、ツイーラは驚いた。

ほんのひと言挨拶しただけの人間を覚えているなんて、信じがたいことだ。

「君が愛らしかったから。……と言えればいいが、教育の賜物だ。挨拶を受けた人間の顔は覚えなさいと教師がうるさいんだ」

冗談を交えて軽快に話す。なるほど、これは人に好かれるはずだとツイーラは感心した。

「ナハルドと仲良くしてくっているらしいな。母が喜んでいたよ。俺からも礼を言わせてくれ。ナハルドの面倒を見てくれてありがとう」

「面倒を見ているつもりはありません。ナハルド様は素敵な友人ですから」

「友人か。婚約者ではなく？」

「婚約者ですけど……まだ友人という感覚の方が強くて」

「まあ、俺たちの歳ならそんなものか。でも、よかつた。ナハルドに君みたいな友人ができて」

ライツエルトの口ぶりは、まぎれもなく弟を思う兄のものだつた。

ナハルドは彼を遠い人と感じているようだが、ライツエルトはそうではないのかも知れない。

「今日面会をお願いしたのは、ナハルド様に祝福の力を制御する方法を教えていただけないかと

思つたからなんです」

ツイーラが用件を切り出すと、ライツエルトは表情を曇らせた。

「それは……難しいかもしれない。俺もできるなら、あいつに何かしてやりたいけど」

「会うことを止められているからですか？」

ナハルドと同じように、ライツエルトにも接触するなどという申し出があつたのだろうか。

ツイーラはそう思つたが、意外なことにライツエルトは首を左右に振つた。

「いや、たしかに祝福を受けた直後はそう言われたが、それはもう意味がないんだ」

「もう意味がない？」

「俺は光の精靈の力を制御できるようになつてゐる。ナハルドが俺に力を使おうとしても、その力と反発して成功しないらしい」

「え？」

「光の精靈は、闇の精靈と同等の強い力を持つてゐるんだ。他の精靈ならば闇の精靈に負けてしまふが、光の精靈の祝福を受けている俺には、あいつの力は通用しない」

つまり、ライツエルトであれば、ナハルドに操られる心配はないらしい。

「なら、どうしてナハルド様にお会いにならないのですか？」

「その方がいいと思つたんだ。ナハルドは俺を嫌つてゐるだろうから」

「そんなことはないと思いますが……」

47 ヤンデレ王子を闇落ちから救つたら愛執まみれの独占欲に囚われました

たしかに、ナハルドはライツェルトに対して複雑な気持ちを抱いているようだつた。けれど、嫌つてはいないとナハルド自身がそう言つていたのだ。

「あいつは俺を他人のように、殿下と呼ぶだろう？ 兄だと思つていらないのが明白だ」

なるほど。彼はナハルドからの他人行儀な呼び方を気にしているのだ。

「ナハルド様から嫌われるのがお辛いのであれば、どうしてもっと関わろうとしたのつか。彼が辛いときに助けてあげられるのは、ライツェルト様だつたのです？」

「……俺が傍にいれば、あいつの負の感情を刺激するだけだと言われたんだ」

ライツェルトは悔しそうに強く拳を握る。

たしかにそういう一面もあるだろう。あらゆる面で優秀なライツェルトが近くにいると、嫉妬したり悔しくなつたりしそうだ。

「でも、ナハルド様はきっと誤解しています。闇の精霊の祝福のせいで、家族にも嫌われてしまつたのだと」

「俺はあいつを嫌いになつてなどいない！」

「なら、それをナハルド様に直接伝えてあげてください」

「それは……だが、今さらどんな顔であいつと関われといふんだ……」

ライツェルトは困つたように眉尻を下げる。

その様子は、今さらライツェルトに頼れないと困惑していたナハルドそつくりで、ツィーラは思わず笑つてしまつた。

「おい、なぜここで笑う」

「も、申し訳ありません。……でも、今のライツェルト様が、ナハルド様によく似ていると思つて」

「俺がナハルドに似ている？」

「ナハルド様も似たようなことをおつしやつていたんですよ。今さらライツェルト様を頼れないと」

「あいつが、そんなことを……」

「ナハルド様はライツェルト様を嫌つていません。きっと、同じお気持ちですよ」

ライツェルトは一瞬、期待するような顔をして、それから気まずそうに頬を搔いた。

「ナハルドと似ていると言われたのは初めてだ」

たしかにふたりは一見すると似ていない。どちらも綺麗な顔立ちだが、ライツェルトは男らしく精悍^{せいがん}で、ナハルドはどちらかといえば中性的で纖細だ。今は髪の色も異なるから、なおさら兄弟には見えないだろう。

でも、相手に拒絶されるのが怖くて一步を踏み出せずにいる様^{さま}はどうでもよく似ている。

「ナハルドは俺を嫌がらないだろうか」

「初めは戸惑われると思います。でも、なんとか歩み寄つていただけないでしようか？ ライツエルト様はお兄様なのですから」

「……そうだな。私の方が兄なのだから、頑張らなくてはいけないな」

「そうです。上の兄弟というのは、わがままを言われるものなのです」

ツイーラがふざけて言うと、ライツェルトの唇が綻んだ。

「そういえば、君も妹であつたな。兄妹仲は良好か?」

「うちの兄は酷いのですよ？ 私の分のお菓子を食べてしまうのです」

「なるほど、それは酷いな。そういうときはどうするんだ？」

「怒つて、新しいお菓子を買いに行つてもらいます」

「ツイーラが語る兄弟喧嘩の様子を、ライツェルトは微笑ましそうに聞いている。

「いいな。……俺とナハルドもそんな風になれるだろうか」

「ライツェルト様が望まれるなら、きっと」

ツイーラが励ますと、彼は覚悟を決めたような顔で頷いた。

それから数日後。ツイーラがナハルドの部屋に遊びに来てしばらくすると、コンコンと扉がノックされる音が聞こえた。

「ナハルド、ライツェルトだ。入つてもいいか？」

どうやら、ライツェルトはナハルドと関わることに決めたらしい。

訪問者の名乗りを聞いて、ナハルドはビクッと身を固くした。明らかに動搖した様子で救いを求めるようにツイーラを見る。

ツイーラは笑顔を作つて頷き、彼を励ました。

「は、入つて……」

ナハルドの声は小さく微かに震えていて、ひどく緊張しているのだと分かる。

けれど、その声はきちんとライツェルトに届いたようだ。少しして扉が開き、ライツェルトが部屋の中へと入つてくる。

「久しぶりだな、ナハルド」

ライツェルトが浮かべた笑みも、少しだけぎこちなく見える。

「な、何しに来たの……」

突き放すような物言いに、ナハルドがしまつたというように顔を顰める。

ツイーラはライツェルトが怒つて帰らないかハラハラしたが、彼は笑顔を崩すことなくナハルドへと近づいていく。

「ツイーラから、お前が力の制御が上手くできずに困つてているのだと聞いた。よかつたら、俺と一緒に訓練してみないか？」

ライツェルトがナハルドに向かつて、手を差し出した。

その手を見つめながら、ナハルドは不安そうに瞳を揺らす。

「む、無理する必要ないよ。ライツェルト殿下は王太子なんだから、僕なんかと関わっちゃダメでしょ？」

「無理などではない。お前の力になりたいんだ。……ダメか？」

ナハルドは迷うように視線をさまよわせるが、それでもまだライツェルトの手は取らなかつた。